

「空脳論」序説

—新しいタイプ同一説の試み—

田所 重紀

1. はじめに

「空脳論」とは、「人間を人間たらしめる心の働き」と「脳」¹の新しい関係を提唱することを目指す、私独自の論考に対する名称である。ただし本論考は、何らかの経験的研究に基づいて一足飛びに新しい両者の関係を提唱することを目指しているわけではなく、まずは両者の関係に関する既存の考え方を批判的に検討することを出発点としている。すなわち、精神医学や認知神経科学をはじめとする、実証人間諸科学において前提とされている両者の関係を批判的に検討した上で、新しい心と脳の観方、さらに進んで新しい人間観を提唱することを目指しているのである。

さて、先述した「人間を人間たらしめる心の働き」とは、実証人間諸科学においては「認知機能」などと呼ばれ、分野によって多少の違いはあるものの、概ね、知覚、記憶、言語、思考などのことを指す。実証人間諸科学では、こうした認知機能が脳によってもたらされていることが共通の前提となっている。このことは、これも分野によって多少の違いはあるものの、「視覚情報は後頭葉の V1 野で処理されている」「作動記憶は前頭前野が司っている」などといった語り方のうちに反映されている。私が「空脳論」において批判的な検討を加えようとしているのは、こうした語り方が暗黙裡に前提としている「認知機能」と「脳」の関係なのである。私は、ここで前提とされている両者の関係こそ、もはや私たちの常識にまで巢食ってしまっている迷信であると断じたい。そしてこの迷信は、認知機能に関する誤った観方と脳に関する誤った観方の双方から巧みに捏造され、それが見事に人口に膾炙するようになった結果の産物なのである。

一方の認知機能に関する誤った観方とは、認知機能は身体活動—四肢や各器官の物理的な運動—とは独立した情報処理ないし計算である²、というものである。すなわち、環境に適応した身体活動をなすために、感覚器官で受け取った情報を適切に処理ないし計算する役割を担っているのが認知機能だというわけである。つまり認知機能とは、環境からの刺激（入力）に対して適切な行動（出力）を生み出すための媒介項なのであり、しかもこの媒介項は、刺激を受け取る感覚や行動としての身体活動とは独立した役割を担っていると考えられているのである。しかしながら、果たして本当にこのような媒介項を想定する必要があるのだろうか。たしかに私たちの身体には、環境適応的な身体活動を可能にするための精巧な生物学的メカニズムが備わっているが、このメカニズムを当の環境適応的な身体活動から切り離して想定する必要はないように思われる。「空脳論」において私が否定しようとしているのは、このような「媒介項としての認知機能」という観方である。結論から先に述べれば、認知機能自体が完結した環境適応的な身体活動なのであり、そのような身体活動から切り離された認知機能なるものは一切存在しないのである。

他方の脳に関する誤った観方とは、脳を独立した一つの器官とみなすものである。結論から先に述べれば、脳は単なる解剖学的部位であり、心臓や肺のように独立した機能を果たす一つの器官ではない。実際のところ「脳」という解剖学的部位は、四肢や全身の各器官の一部が集まって構成されているだけで³、それ自体が何か一つの完結した機能を果たしているわけではないのである。

「空脳論」という名の論考において私が最終的に目指しているのは、以上のような認知機能と脳の双方に関する誤った観方から捏造された、次のような迷信を葬り去ることである。それはすなわち、「人間を人間たらしめる認知機能は、脳という情報処理ないし計算装置によってもたらされている」というものである。そのために本稿では、認知機能を身体活動の一つとして正しく定位した上で、認知機能と脳の新しい関係を提示したい。こうした新しい観方をとることによって、かつての迷信は葬り去られ、そこから全く新しい人間観が生まれてくるものと私は確信している。

2. 「空脳論」における戦略と前提

人間を人間たらしめる心の働きとしての認知機能を身体活動の一つとして理解しようという試み自体は、決して私の独創ではない。認知機能を情報処理や計算とはみなさず、身体化され環境に埋め込まれたものとみなす試みは、哲学や心理学の分野においては古くから存在する⁴。しかしながら、このように「身体化され環境に埋め込まれた認知機能」という旗標のもとで行われてきた先行研究に対し、私は大雑把に述べると次のような二つの不満を抱いている。

その一つは、これらの研究が必ずしも人間に固有な認知機能だけを対象としていたわけではなく、知覚や協調運動など、他の動物にも認められるような認知機能をも含めていた点である。そうすると、少なくとも人間固有の認知機能についてだけは身体活動とは独立した情報処理ないし計算である、と反論される余地を残してしまうことになる。そしてもう一つは、認知機能が身体化され環境に埋め込まれたものであるとした場合、そのような認知機能と脳が一体どのような関係にあるのか、すなわち心身問題—広義の心脳問題—に関してどのような立場をとることになるのかが不明確であった点である。この点については、心身問題に関して形而上学的立場を明示して議論する英米圏の心の哲学 (Philosophy of Mind) の系譜の中では、こうした認知機能の観方を推し進める論者が比較的少なかったという事情が関係しているのかもしれない。

このような経緯を踏まえて「空脳論」の独自性を改めて強調するとすれば、それは次の二点に集約される。まず一つは、人間に固有と思われる、人間を人間たらしめる認知機能のみを考察対象とする点である。本論考では、このような認知機能として、言語、思考、意識といった、言語と密接に関連した心の働きに焦点をあてる。そしてもう一つは、新しい心身問題上の立場を提示する点である。つまり本論考においては、人間を人間たらしめる心の働きの本性を知ることと心身問題上の立場を明確にすることは、互いに呼応し合った関係にあるものとみなされているのである。

「空脳論」においては、人間を人間たらしめる、言語と密接に関連した心の働きとして、現代英米圏の心の哲学において盛んに議論されている命題的態度⁵をとりあげ、それを主たる議論の対象とする。その最大の理由は、命題的態度が言語と密接に関連した心的事象であり、いかにも人間固有の心の働きらしく見えるというだけにとどまらず、その存在論的身分をめぐる様々な心身問題上の立場からの夥しい数の議論が蓄積されてきている、という点にある。つまり、人間固有の心の働きらしい命題的態度を身体活動の一つとして理解した上で、それがどのような存在論的身分をもつことになるのかを明示することは、同時に新たな心身問題上の立場を提示することにもなる、というわけである。さらに、直観的には身体活動とは存在論的身分を全く異にするとと思われる命題的態度を主たる対象とし、それを身体活動の一つとして理解することができれば、他の認知機能を身体活動の一つとして理解することは容易になるものと期待できる。実はこの点にこそ、本論考における戦略上の要所がある。すなわち命題的態度という、いかにも人間を人間たらしめる心の働きらしい心的事象に議論の照準を合わせることによって、認知機能一般の存在論的身分と心身問題上の立場を一体のものとして鮮明に描き出すことが可能になる、というわけである。このようにして最小の議論で効果的に、本論考が目指す新しい心と脳の関係を示唆することが可能になると考える。

最後に、「空脳論」における前提について触れておきたい。その前提とは、いかなる「心の働き」についても、あくまで物的一元論の枠組みの中で理解するということである。ここで言う「物的一元論」とは、この世界は因果的に閉じた物理法則に従う物的存在のみによって構成されており、生命現象と同様に心的事象もまた、物的存在が物理法則に従って複雑に組織化される過程で生じたものと考えた立場のことである⁶。この立場は、人間を人間たらしめる心の働きを、生物学的すなわち物的存在としての身体活動の一つとして理解しようという、本論考が目指す方向性と合致している。さらに、自然科学を尊重するこの立場は、決して既存の実証人間諸科学を否定することなく、自然科学的な世界観と衝突しないような形で人間に固有な心の本性を明らかにし、新しく有

益な人間観を提唱しようとする本論考に相応しいものと言える。

3. 命題的態度と心身問題

ここで、現代英米圏の心の哲学において命題的態度がどのような存在とみなされてきたのかについて、心身問題上の立場と関連させて、ごく大雑把に振り返っておきたい。

命題的態度の存在論的身分をめぐる議論は、基本的には脳状態⁷との異同という観点から行われてきており、大きく、脳状態とのタイプの同一性を認める還元主義と、脳状態とのタイプの同一性を認めない非還元主義の二つの立場に分かれる。前者の還元主義は概ね「心脳同一説」⁸と呼ばれる立場のことを指すが、この立場は、命題的態度は対応する脳状態とタイプの同一であると考える。このような心脳同一説は、1950年代半ばに登場して一世を風靡したが、1960年代には衰退したというのが定説になっている。こうした還元主義に代わって現在主流となっているのが非還元主義であり、こちらは、トークンの同一性を堅持する立場とトークンの同一性すら放棄する立場の二つに大別される。前者の代表としては機能主義と非法則的一元論という立場が、後者の代表としては消去主義という立場がある。すなわち、機能主義ないし非法則的一元論の論者は、命題的態度は対応する脳状態とタイプの同一とまでは言えないが、トークン的には同一とみなしているのに対し、消去主義の論者は、命題的態度はトークン的にすら脳状態と同一ではないと考えている。このように現代英米圏の心の哲学においては、大きく還元主義と非還元主義に分類される様々な心身問題上の立場が提唱されているが、以下に詳述するような理由により、いずれも決定的な立場にはなり得ていない。

まず、現在主流となっているは非法則的一元論を中心とした非還元主義については、いずれも共通して根本的な難点を抱えている。それはすなわち、心的事象それ自体は因果関係の担い手にはなれないという、いわゆる心的因果にまつわるアポリアを回避できないことである。先に確認したように、いずれの非

還元主義の立場もタイプの同一性を否定しており、心的事象は完全には物的事象に還元できないと考えている。それゆえ非還元主義においては、法則性に裏打ちされた因果関係⁹を取り結ぶことができるのは物的事象だけだと考えられていることになる¹⁰。そうすると、法則性に裏打ちされた、言わば真正の因果関係を取り結ぶことができるのは結局のところ物的事象だけであり、心的事象それ自体は真正の因果関係の担い手にはなれない、ということになってしまう。しかしながらこの帰結は、明らかに私たちちがもつ素朴な直観と鋭く対立する。というのも私たちは、心的事象としての信念や欲求それ自体が、他の信念や欲求さらには行動を因果的に惹き起こしている、という確固とした直観をもっているからである。

他方、唯一還元主義の立場をとる心脳同一説においては、心的事象は脳状態という物的事象に還元されると考えられているため、先に述べたような心的因果にまつわるアポリアは確かに回避される。しかしながらこの心脳同一説は、第7節で詳述するように、非還元主義の立場から、心的事象の非法則性と多型実現可能性という二つの観点に基づいた批判がなされており、これらの批判は現時点では決定的なものとみなされている。心脳同一説が支持を得た期間が意外にも短かったのは、このような事情があったことによる。

以上のように、これまでに提唱されてきた心身問題上の立場は、過去の遺物とされつつある還元主義はもちろん、現在主流となっている非還元主義も含め、いずれも満足のいくものではない。このような分析を踏まえて私が本稿において試みるのは、心的因果にまつわるアポリアを回避するために還元主義の立場を堅持しつつ、これまで非還元主義の立場からなされてきた批判を回避できるような、全く新しいタイプ同一説を提唱することである。結論から先に述べれば、唯一還元主義の立場をとった心脳同一説の敗因は、命題的態度のような心的事象との異同を考える相手を脳状態に限定してしまったことにあると私は睨んでいる。このような状況に陥った背景には、命題的態度という心的事象もまた、脳状態がまさにそうだとみなされているように、環境から受け取った刺激から適応的な行動を生み出すための因果的媒介項とみなすことができるが、こ

うした因果的同型性に基づいて、命題的態度と脳状態の異同が議論されてきたという経緯がある。しかしながら次節で詳述するように、命題的態度との異同を考える相手を脳状態に限定する必要はないのであり、こうした制約から自由になることで、非還元主義の立場からの批判を回避し得る全く新しい還元主義の立場をとることが可能になるのである。

4. 命題的態度の二つのあり方

ここで、「空脳論」において命題的態度がどのような存在論的身分をもつものとみなされているのかについて詳述する。その際の出発点となるのは、以下に詳述するような命題的態度の二つのあり方を区別することであるが、実際のところ私たちは、こうした二つのあり方を現に区別している。例えば、『『コーラが飲みたい』と思って冷蔵庫に向かった』という語り方においては、「コーラが飲みたい」という欲求は、「冷蔵庫に向かう」という行動を惹起する原因として、行動を起こす直前にその人の身体に起こった一つの出来事とみなされている。それに対し、『『コーラが飲みたい』とあっていて、ふと『コーラは冷蔵庫にある』ということに気づいたので冷蔵庫に向かった』という語り方においては、「コーラが飲みたい」という欲求は、その人の行動に持続的な影響を及ぼすような傾向性ないし準備状態とみなされている。本稿では、前者のような、ある特定の時点において行為者の身体に生起する出来事としての命題的態度の方を「現に生起している心的出来事 (occurrent mental event)」として分類し、後者のような、ある特定の行動を惹き起こす準備状態ないし傾向性としての命題的態度の方を「傾向的な心的状態 (dispositional mental state)」として分類することで区別する¹¹。このような区別をした上で、それぞれの命題的態度がどのような存在論的身分をもつことになるのかを以下に明示することにしたい。

まず、前者の「現に生起している心的出来事としての命題的態度」の方であるが、こちらについては「空脳論」に固有な観方とっており、個々の命題的態度は対応する言語的内容をもった「自分語り」(物的出来事の一つ)とタイ

的に同一であると考え。例えば、「コーラが飲みたい」と思って冷蔵庫に向かっている人の身体では、「コーラが飲みたい」という（現に生起している欲求としての）命題的態度が生起していると考えられるが、この命題的態度を「コーラガノミタイ」¹²という自分語りとタイプの的に同一だとみなすわけである。ただし、このときの「コーラガノミタイ」という自分語りは、「冷蔵庫に向かう」という行動を惹き起こす原因の一部であり、この自分語りだけが単独でこうした行動を惹き起こしているとは考えない。「冷蔵庫に向かう」という行動が生起するためにはそれ相応の生物学的準備状態¹³が整っている必要があり、そのような状況下においてはじめて、自分語りだけがこうした行動を惹き起こすことができる。と考える。

次に、後者の「傾向的な心的状態としての命題的態度」の方であるが、こちらもある種の生物学的状態（物的状態の一種）とタイプの的に同一とみなすが、個々の命題的態度との一対一の同一性は放棄する。すなわち、行為者に帰属され得る複数の（傾向的な心的状態としての）命題的態度は、まとめて全体として、特定の行動を惹き起こす準備状態としての生物学的状態とタイプの的に同一であると考え。ここで注意すべきは、このような準備状態としての生物学的状態のいかなる部分も、帰属され得る個々の命題的態度の間には同一性が成り立っていないということである。そこで、このような生物学的状態に裏打ちされていない個々の命題的態度については、ある種の解釈主義の立場と同様に、行動を理に適ったものにするための「便利な理論的指定物」¹⁴とみなすのである。例えば冷蔵庫に向かっている人に対しては、「コーラが飲みたい」という欲求、「コーラは冷蔵庫にある」という信念、「コーラを飲むと喉の渇きが癒される」という信念、等々の命題的態度を帰属させることができるが、こうした複数の命題的態度がまとめて全体として、「冷蔵庫に向かう」という行動を惹き起こすための準備状態としての生物学的状態とタイプの的に同一だとみなすわけである¹⁵。

結局のところ「空脳論」においては、命題的態度は、現に生起している心的出来事にしる傾向的な心的状態にしる、物的存在としての自分語りないし生物

学的準備状態とタイプの同一であるとみなされていることになる。たしかに、傾向的な心的状態としての命題的態度の方は、複数の命題的態度と生物学的準備状態との間に全体論的なタイプ同一性が成り立っているだけで、個別的なタイプ同一性が成り立っているわけではないが、現に生起している心的出来事としての命題的態度の方も含め、全体としてはタイプ同一説の範疇に属すると言える。それゆえ、心的出来事としての命題的態度が自分語りとタイプの同一であるという「空脳論」に固有の観方を強調し、本論者が新たに提示する心身問題上の立場を「自分語り同一説」と名づけることにする。

5. 「自分語り」と「意図的行動」および「意識的な行動変容」の関係

ここで、本稿において既に何度も登場している「自分語り」について詳述しておきたい。「空脳論」における「自分語り」とは、周囲の他者からは聞こえないように、自分に対してのみ語ってそれを自分で聞くという、自己完結的な語り行動のことを指す。この自分語りは当然のことながら、声帯を震わせて空気の疎密波を生じさせる、通常の語り行動—いわゆる「発話」—ができることが前提となっている。自分語りは、こうした通常の語り行動から他者に聞かせるという機能を限界まで削ぎ落とし、自分自身のためだけにとる特殊な語り行動とも言える。すなわち、周囲の他者に聞こえないように静かに声帯を震わせ、あるいは場合によっては声帯をほとんど震わせることなく語り、その内容を自分だけが聞く—このときも場合によっては鼓膜はほとんど震えていないかもしれない—という、ある種の技能が要求される語り行動なのである。

ここで重要なのは、こうした自分語りもれっきとした身体活動の一種であり、行為者の身体において生起する生物学的出来事（物的出来事）の一つだという点である。それゆえこの自分語りは、環境内に生起する様々な物的出来事や行為者の身体に生起する別の自分語りによって惹き起こされ、別の自分語りや他の身体活動を惹き起こすことができるのである。さらにこの自分語りは、以下で詳述するように、意図的行動や意識的な行動変容において重要な役割を担っ

ているのである。

ここで、自分語りと命題的態度の関係についてももう少し詳しく述べてみたい。例えば、「コーラは冷蔵庫にある」という信念—傾向的な心的状態としての命題的態度—をもって、ふと「コーラが飲みたい」という欲求—現に生起している心的出来事としての命題的態度—が生じて冷蔵庫に向かうことになった人について考えてみたい。このとき生じた心的出来事としての「コーラが飲みたい」という欲求は、「コーラガノミタイ」という自分語りとタイプの同一であるとする。そしてこの自分語りは、「冷蔵庫に向かう」という行動を惹き起こす生物学的準備状態が整った状況下において、実際に「冷蔵庫に向かう」という行動を惹き起こすのである。ここで重要なのは、「コーラガノミタイ」という自分語り単なる生物学的出来事ではなく、同時に「コーラが飲みたい」という言語的内容をもっていることである。この言語的内容は、心的状態としての「コーラは冷蔵庫にある」という信念における言語的内容と相俟って、「冷蔵庫に向かう」という行動を理に適ったものに行うことができる。つまり自分語りは、生物学的出来事として因果関係の担い手になるだけでなく、同時に合理的関係の担い手にもなっているのである。さらに、「冷蔵庫に向かう」という行動を惹き起こす生物学的準備状態は、「コーラは冷蔵庫にある」という信念だけでなく、「コーラを飲むと喉の渇きが癒せる」という信念などの他の傾向的な心的状態としての命題的態度を含めた、複数の命題的態度の集合全体とタイプの同一な関係にあるが、この生物学的準備状態はまた、自問も含め「なぜあなた(私)は冷蔵庫に向かっているのか」という質問を受けたときに、「コーラガノミタイカラダ」や「コーラハレイゾウコニアルトオモツタカラダ」といった語り—自分語りも含む—のような身体活動(生物学的出来事)を惹き起こす準備状態でもあると考えられる。

次に、自分語りと意図的行動の関係について述べてみたい。例えば、「コーラを飲もう」という意図¹⁶をもってコーラのボトルに手を伸ばすとき、この「コーラのボトルに手を伸ばす」という行動は「意図的行動」と呼ばれるが、このときの「コーラヲノモウ」という自分語りは、「コーラのボトルに手を伸ばす」

という行動を惹き起こす生物学的準備状態が整った状況下において、実際に「コーラのボトルに手を伸ばす」という行動を惹き起こす。その一方で、この自分語りをもつ「コーラを飲もう」という言語的内容は、「コーラのボトルに手を伸ばす」という行動を理に適ったものに行うことができる。結局のところ意図的行動とは、未来の行動に関する言語的内容をもった自分語りによって惹き起こされた行動のことだと言えるのである。

続いて今度は、自分語りと意識的な行動変容の関係について述べてみたい。例えば、今まで普通のコーラを飲む習慣をもっていた人が、今まで通りの「普通のコーラのボトルに手を伸ばす」という行動から、「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という行動へと意識的に変容させる状況を考えてみたい。こうした状況においては、「普通のコーラではなくゼロカロリーコーラを飲むべし」という言語的内容をもった自分語り行動変容の鍵を握っているわけだが、この自分語りは、「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という新しい行動を惹き起こす生物学的準備状態が整った状況下において、実際に「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という行動を惹き起こす。このとき、「普通のコーラではなくゼロカロリーコーラを飲むべし」という言語的内容の方は、「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という行動を理に適ったものになっている。ただし、こうした新しい行動を惹き起こす生物学的準備状態が整うまでは、「フツウノコーラデハナクゼロカロリーコーラヲノムベシ」という自分語りと「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という行動との間の因果的連携を繰り返して身につける—いわゆる「連合学習」—という過程が必要とされる。さらに、こうした過程の繰り返しによって、ついには自分語り自体が不要なものとなり、適切な状況下で即座に「ゼロカロリーコーラのボトルに手を伸ばす」という新しい行動をとることができるようになる¹⁷。このように、新しい行動を理に適ったものにするような言語的内容をもった自分語り全体が全身に因果的影響力を及ぼし、それによって新しい行動を惹き起こすための生物学的準備状態が整えられるという一連の過程こそが、意識的な行動変容の本態であると考えられる。

以上のように、「空脳論」における心身問題上の立場である「自分語り同一説」は、自分語りのもつ二重の機能に着目して提唱されている。すなわち自分語りは、全身を用いた身体活動の一種であり、それ自体が法則性に裏打ちされた因果関係の担い手となる一方で、特定の言語的内容をもっており、それが他の自分語りや行動を理に適ったものに行うことができる。こうした二重の機能をもつ自分語りは、理に適った行動を惹き起こすための因果的な先行条件になったり、理に適った行動へと変容させるための身体的な準備状態を整えたりすることによって、「意図的行動」や「意識的な行動変容」と呼ばれる人間固有の行動様式を特徴づけていると考えられる。このように「自分語り同一説」は、人間を人間たらしめる心の働きの本性を明らかにするのに相応しい立場と言える。

6. 言語的内容の存在論

ここで、自分語りの特殊性を理解する際に鍵となる「言語的内容」なるものが、どのような存在論的身分をもつものとみなされているのかについて詳述しておきたい。

「空脳論」においては、前提としている物的一元論に沿った形で、言語的内容を専ら因果的機能に基づいて理解する立場をとる。すなわち、身体活動の一種としての語り—自分語りも含む—や光学的媒体の一種としての文章は、語り手や書き手によって特定の仕方で惹き起こされ、聞き手や読み手に特定の行動—聞き手や読み手側の自分語りも含む—を惹き起こすという機能をもっているが、このような因果的機能をもつことが、これらの語りや文章が特定の言語的内容をもつことに他ならない、と考えるのである¹⁸。

ただし、語りや文章がもつ機能を、それ以外の一般的な因果的機能—物質の生成や生物における代謝など—と区別することにはそれなりの意義がある。というのも、語りや文章がもつ機能には、たとえ最終的には物的性質に還元されるところとしても、文化的ないし社会的な要素が不可欠なものとして含まれているか

らである。そこで本論考では、このような文化・社会的な要素を不可欠なものとして含んだ因果的機能のことを「生態学的機能」¹⁹と名づけることにする。すなわち「生態学的機能」とは、人間をその人が属する文化・社会的共同体の一員たらしめるのに役立つ機能のことである。例えば「ミズガノミタイ（水が飲みたい）」という語りは、水を提供できる日本語の理解者から水を提供してもらえ、などといった生態学的機能をもつが、この語りの言語的内容はこうした生態学的機能に基づいて理解されるのである²⁰。こうして何らかの特定の生態学的機能をもった語りや文章はすべて、このような形で特定の言語的内容をもつとみなされる。

最後に、このような形で言語的内容を因果的機能に基づいて理解することが、これまで述べてきた合理性と法則性の関係に関してどのような帰結をもたらすのかについても触れておきたい。結論から先に述べれば、言語的内容を因果的機能に還元することは、合理性を法則性に還元することに他ならない。そもそも、言語的内容を因果的機能に基づいて理解するという本論考の立場は、命題的態度同士や命題的態度と行動の間に成り立つ合理的関係—理に合った関係—を、それらとタイプの同一とみなす自分語りや生物学的状態が取り結ぶ法則的關係に基づいて理解することを前提にしている。つまり、合理的関係と法則的關係を別種の秩序とはみなさず、前者は後者に還元されるものと考えていることになる。結局、命題的態度に関してタイプ同一説をとることの必然的な帰結として、合理性は法則性に還元されるという立場をとることになるのである²¹。

7. 「自分語り同一説」に対する批判と応答

「空脳論」における心身問題上の立場として提示された「自分語り同一説」は、既存の心脳同一説とはその内容を大きく異にするが、大雑把な区分としては同じタイプ同一説に属する。したがって、これまで心脳同一説に対して向けられてきた様々な批判が、この「自分語り同一説」にも的中してしまう恐れがある。

以下では、心脳同一説に対する従来からの批判が的中するのかどうかについて検討してみたい。

第3節で触れたように、心脳同一説に対して向けられてきたこれまでの批判は次の二つに集約され、いずれも決定的なものだと考えられている²²。その一つは、かの有名な非法則的一元論²³に基づく批判である。すなわち、心的事象としての命題的態度と他の命題的態度や行動との間には厳密な法則的關係は成立せず、それとは別の合理的關係が成立するが、心脳同一説はこうした非法則的關係をきちんとすくい取れていないのではないかと、いうものである。そしてもう一つは、心的機能の多型実現可能性に基づく批判である。すなわち、命題的態度が担っている因果的機能は必ずしも私たち人間の脳によってしか実現できないわけではなく、物理的組成の全く異なる組織や人工物によっても実現可能であるため、タイプの同一性は強すぎるのではないかと、いうものである。

まず、非法則的一元論に基づく批判の方から検討してみたい。第4節で述べたように「自分語り同一説」においては、自分語りないし命題的態度における言語的内容に着目することにより、命題的態度同士や命題的態度と行動の間に成り立つ合理的關係をきちんとすくい取っている。問題は、ここでの合理的關係が非法則的な關係なのかどうかである。第6節で述べたように、タイプ同一説の一種である「自分語り同一説」は、その必然的な帰結として、合理性は法則性に還元されるとする立場をとる。したがってこの限りでは、合理的關係を非法則的な關係とみなす立場からの批判が的中することになる。

しかしながら、合理的關係のある種の法則的關係とみなす余地は十分にあるように思われる。合理性が法則性に還元できないとする代表的な論拠は、合理性が体系化不可能であるという点に求められるが、これは決定的な論拠ではない²⁴。そうなると、合理的關係が非法則的な關係だということを前提にしてタイプ同一説を批判することは、少なくとも勇み足ということになる。何となれば、非法則的一元論の方が合理的關係の本質をとらえ損なっている可能性があるからである。

次に、心的機能の多型実現可能性に基づく批判について検討してみたい。この批判は、タイプ同一説に分類される心脳同一説に対して、トークン同一説の一つである機能主義の立場からなされたものである。つまり、この批判が「自分語り同一説」にも的中するかどうかは、心的出来事としての命題的態度とタイプの同一とみなされている「自分語り」という身体活動が、他の生物や人工物によっても実現可能かどうかという点にかかっていると考えられる。たしかに、あくまで表面的な言語的交流だけであるならば、私たち人間とそのような交流をなし得る他の生物や人工物が存在する余地は十分にあるように思われる。しかしそれでもなお、自分語りによる自己制御を介した言語的交流ということになると、そのような交流をなし得る他の生物や人工物が存在する余地はないと考えられる。というのも、現にもっているような固有の発声器官を含んだ特殊な身体を私たち人間が進化の過程で獲得したという進化的事実と、そのような特殊な身体を用いて他の人間たちと言語的交流を行ってきたという発達の事実の両方が、自分語りによる自己制御を実現するための構成要件となっている可能性が高いからである。つまり、私たち人間以外の生物や人工物が「自分語り」という身体活動を実現することは、概念的には可能であっても、物的には不可能なのである²⁵。

以上のように、非法則的一元論に基づく批判も多型実現可能性に基づく批判も、いずれも「自分語り同一説」には的中しないと考えられる。

8. 「自分語り同一説」の意義—新しい心観そして人間観へ

ここまでの論考を踏まえ、本稿で提唱する「自分語り同一説」の長所や存在意義について述べてみたい。

まず、心身問題上の立場としての最大の長所は、心的因果にまつわるアポリアを回避できるという点にあると考えられる。心的出来事か心的状態かにかかわらず、信念や欲求などの命題的態度を、自分語りという物的出来事ないし生物学的準備状態という物的状態とタイプの同一とみなすこの立場は、大きく

還元主義に分類される。すなわち、命題的態度がもつとされる心的性質はすべて、自分語りないし生物学的準備状態がもつ物的性質に還元可能なものであり、そのような還元ができない心的性質というものの存在を認めない。それゆえ、命題的態度が他の命題的態度や行動と法則性に裏打ちされた因果関係を取り結ぶことを自然に理解することができる。つまり「自分語り同一説」は、「コーラが飲みたい」という欲求が「コーラのボトルに手を伸ばす」という行動を因果的に惹き起こしているという素朴な直観を、物的一元論の枠組みの中で擁護することができるのである。

さらに進んでこの「自分語り同一説」は、なぜ私たち人間だけが、言語的内容をもった信念や欲求などを抱くことによって、自分自身の行動をある程度自由に引き出したり修正したりできるのか、という問いに明確な答えを与えることができる。というのもこの立場は、法則性に裏打ちされた因果関係の担い手である自分語り、他の命題的態度や行動を理に適ったものにするという、合理的関係の担い手である言語的内容をも同時にもち、と考えられているからである。つまり私たち人間は、法則的關係の担い手である自分語りを合理的関係に基づいて利用することにより、自分自身の行動をある程度自由に引き出したり修正したりしているのである。当然のことながら、言語的内容をもった自分語りという行動それ自体が、厳密な自然法則に従う生物学的メカニズムによって実現されている以上、ここでの「自由」は限定的なものにとどまる。しかしながら、たとえこのような限定的なものであれ、合理性に基づいて自分の行動を制御できるという事実こそ、人間固有の自由意思の本態なのではなからうか。

こうして本稿において提唱する「自分語り同一説」は、「自分語りする動物」という新しい人間観を提示することになると考える。すなわち、私たち人間がなすあらゆる行動は、この世界に住む他の動物のそれと同じく厳密な物理法則に従っているが、私たち人間だけが「自分語り」という特殊な身体活動を身につけ、それによってある程度自由に自分自身の行動を制御できるようになった、というものである。この新しい人間観は、「知的活動」と呼ばれるものも含めたあらゆる人間の営為を環境適応的な身体活動とみなすことによって、他の動

物と人間の間の連続性を担保しつつ、合理的関係の担い手である言語的内容をもった「自分語り」という特殊な身体活動に着目することで、人間を人間たらしめる心の働きの本性を明らかにし、他の動物との間の不連続性がどこにあるのかを明確に示してくれているのである。

9. 結び—今後の課題も含めて

本稿では、実証人間諸科学においてこれまで前提とされてきた「人間を人間たらしめる心の働き」と「脳」の関係を批判的に検討し、新しい両者の関係、さらには新しい人間観の提唱を目指す、「空脳論」という名の論考を提示した。その序説としての本稿では、いかにも人間を人間たらしめる心の働きらしい命題的態度に着目し、この命題的態度がどのような存在論的身分をもつことになるのかを明示するとともに、タイプ同一説の範疇に属する「自分語り同一説」という新しい心身問題上の立場を提示した。

この新しい立場はあくまでも還元主義を堅持し、命題的態度を「自分語り」という身体活動ないし生物学的準備状態とタイプの同一とみなすため、心的因果をめぐるアポリアを容易に回避することができるという長所をもっている。また、自分語りが合理的関係の担い手となる言語的内容をもつとみなすことにより、命題的態度が他の命題的態度や行動との間で取り結ぶ合理的関係をも適切にすくい取っていると考えられる。さらにこの立場は、言語的内容をもった命題的態度に基づいて、なぜ人間だけが自分自身の行動をある程度自由に引き出したり修正したりできるのかを説明してくれるだけでなく、「自分語りする動物」という新たな人間観をも提示していると考えられる。

最後に今後の課題についても触れておきたい。本論考が自分語りを中心とした語り行動の特殊性に依拠していることから容易に推察されるように、「空脳論」という論考が成功するかどうかは、語り行動の本性を明確に捉えられるかどうかにかかっている。とりわけ、語り行動と人間を人間たらしめる心の働きの関係を明確にすることは、そのための最重要課題と言っても過言ではない。

今後はこの両者の関係について更なる考察を重ね、「空脳論」を魅力ある確固たる論考に育てていく予定である。

註

1 一般に「脳」とは、解剖学的には大脳、間脳、脳幹および小脳（小脳を脳幹に含めることもある）のことを指すことが多いが、ときに脊髄を含めた中枢神経全体を指すこともある。それどころか、ときには脳神経や脊髄神経などの末梢神経までも含めて指すこともある。本稿における「脳」とは、ひとまず「大脳を中心とした中枢神経系」のことを指すものとして議論を進める。

2 このような認知機能の観方が人口に膾炙した背景には、コンピュータとのアナロジーが一役買っている。コンピュータとのアナロジーが認知心理学（認知科学）の成立にいかにか大きな影響を及ぼしてきたかについては、乾編(1995)による認知心理学の教科書における序文（1～4巻共通）に分かりやすく示されている。

3 このような脳の観方は、四肢や全身の各器官の観方にも変更を迫ることになる。すなわち四肢や全身の各器官には、解剖学的部位としての「脳」の一部が含まれているとみなす必要がある。例えば「眼」という感覚器官には、眼球だけでなく、V1野を始めとする大脳の視覚皮質も含まれているのである。

4 詳細はともかくとして、ハイデgger（Heidegger 1961 参照）やメルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty 1945 参照）といった現象学系の哲学者や、ギブソン（Gibson 1979 参照）を嚆矢とする生態学的心理学者たちは、概ねこのような認知機能の観方を推し進めていたと考えられる。さらに近年においては、ヴァレラら（Vallela et. al 1991 参照）やクラーク（Clark 1997 参照）といった認知科学者ないし哲学者たちによる認知機能の観方もまた、この範疇に分類することができる。

5 『『私は太っている』と信じる』『皆から注目されたい』と欲する』といったように、『命題』+心的態度』という構造をもった心的事象のことを、心の哲学では「命題的態度」と呼ぶ。多くの哲学者は、このような命題的態度としての心的事象は信念と欲求が基本になっており、恐れや願望などの他の心的事象は、信念と欲求の組

み合わせに還元できると考えている。また、すべての心的事象を命題的態度とみなし得るかどうかについては見解が分かれているが、少なくとも思考や意識といった、言語と密接に関連した人間固有の心的事象について考察する上で、こうした命題的態度が重要な役割を担っていることについては一致している。命題的態度に関する平易な解説は金杉(2007)を、信念と欲求の基本性については Searle(1983)を参照。

6 本稿における「物的一元論」は「物理主義」とも呼ばれ、その内容は概ね Kim(1996)の見解に負っている。

7 本稿における「脳状態」とは、大脳を中心とした中枢神経系の生物学的状態のことを指す。ただしこれは、ある特定の生物学的状態を惹き起こす準備状態を指すこともあれば、現にそのような状態にあるときの因果系列の一部を指すこともある。

8 「心脳同一説」と呼ばれる立場にも様々なものがあるが (Borst 1970を参照)、本稿では概ねアームストロングが提唱する立場を念頭に置いている (Armstrong 1968を参照)。ただし、この立場を機能主義に分類する論者もいる。

9 本稿における因果関係および法則的関係のあり方は、デイヴィドソンが提唱する「因果性の法則論的性格」と呼ばれるテーゼに基づいている (Davidson 1980 および信原 1999を参照)。

10 心身問題に関して非還元主義の立場をとることが心的因果にまつわるアポリアを不可避にする、という論点については Kim(1998)を参照。

11 本稿におけるこの二つの区別は、ライルの心観を参考にしている (Ryle 1949を参照)。ただし彼は、一見「現に生起している (occurrent)」ように思われる心的事象も、実はすべて「傾向的 (dispositional)」なものだと考えていたようである。

12 本稿では、このような物的出来事としての語り—自分語りを含む—をカタカナ表記することになっているが、それは、「コーラが飲みたい」といったような命題ないし言語的内容と区別するためである。

13 ここで言う「生物学的準備状態」とは、私たち人間(動物)がある特定の行動をとることを可能にする、全身の生物学的な先行条件を指す。具体的には、神経系における神経細胞の電気的変化や神経伝達物質の化学的変化、全身の筋肉における形態学的変化などの諸々の生物学的事象全体を指す。

14 この観方は、解釈主義の代表的論者であるデネットの見解に負っている（Dennett 1989 を参照）。ただし本論考においては、デネット流の解釈主義とは異なり、個々の命題的態度を文字通り「非実在的な道具的存在」とみなしているわけではない。たしかに、個々の命題的態度は何らかの実在する生物学的状態に裏打ちされているわけではないが、複数の命題的態度の集合は全体として何らかの実在する生物学的状態にきちんと裏打ちされている、と考えられているからである。

15 ここでのタイプ同一性についてももう少し詳しく説明すると次のようになる。すなわち、この状況で「冷蔵庫に向かう」という行動を生み出す先行条件としての生物学的準備状態のトークンはどれも、「コーラが飲みたい」という欲求、「コーラは冷蔵庫にある」という信念、「コーラを飲むと喉の渇きが癒される」という信念、等々の命題的態度の集合全体の何らかのトークンと同一である、といった具合になる。ただし、すべての生物学的状態が何らかの命題的態度の集合とタイプの同一であるわけではなく、このような同一視が可能な生物学的状態はごく一部に過ぎないと考える。

16 本稿では本例のような意図も命題的態度としての心的事象とみなす。一般に、信念と欲求の組み合わせから直接行動が帰結することもあれば、信念と欲求の組み合わせからまず意図が形成され、そこから行動が帰結することもある。

17 こうした新しい行動が完全に習慣化し、もはや何らの自分語りも伴わないようなものになった場合、このような習慣的行動を可能にするための生物学的準備状態は、もはや複数の命題的態度の集合とタイプの同一であるような状態ではなくなっていると考えられる。この点については註 15 も参照のこと。

18 このように、言語的内容をそれがもつ因果的機能に還元する立場は、ヴィトゲンシュタインが提唱したとされる「意味の使用説」や、その発展版とも言える「機能主義的意味論」と深い関わりがある（Peacocke 1992 参照）。

19 この用語は、ミリカンによって「個体の生存に役立つ機能」として定義された「目的論的機能」（彼女の用語では「固有機能 (proper function)」）という語を参考にして、私が創作したものである（Millikan 1984 を参照）。人間を文化・社会的共同体の一員たらしめる機能の一部はその人の生存にも役立つという点で、生態学的機能と目的

論的機能はそれぞれの外延の一部を共有していると言える。

20 「ミズガノミタイ」という語りと「アイ・ワント・トゥー・ドリンク・ウォータ－ (I want to drink water.)」という語りは互いに類似した因果的機能をもつが、後者は英語の理解者にしか通じないという点で、この二つの語りはそれぞれ異なる生態学的機能をもつ。このように考えると、互いに翻訳関係にある二つの語りはそれぞれ異なる言語的内容をもつということになってしまい、一見直観に反する帰結が得られるように思われるかもしれない。しかしながら、二つの語りが互いに翻訳可能であるという事実は、決して両者が同一の言語的内容をもっていることを反映しているわけではなく、精々それらが互いに類似した言語的内容をもっていることを反映しているに過ぎないと考えられる。このような論点は信原(1999)にも認められる。

21 このように合理性は法則性に還元されるとする立場をとった場合、ここで言う合理性と自然科学において典型的に見られる法則性の相違点がどこにあるのかを明らかにする必要が生じてくる。この点について詳述することは本稿の守備範囲を大幅に超えてしまうため、結論のみ簡潔に述べるなら、合理性とは特殊な条件下においてのみ成り立つ法則性のことだと私は考える。すなわち、私たちが生きる常識的な生活世界でのみ成り立つ法則の集合体が合理性に相当するのであり、この関係は古典力学と特殊相対性理論の関係に類比的なものと考えている。

22 この論点については美濃(2004)に負っている。

23 非法則的一元論については Davidson(1980)を参照。また、その平易な解説については信原(1999)を参照。

24 合理性が体系化不可能であるがゆえに法則性に還元できないとする論点は、Child(1994)に負っている。さらに、合理性が体系化不可能なのは、合理性が文脈依存的な全体論的性格をもつことによるとされる(信原 1999, 金杉 2014 参照)。しかしながらこれらの論点は、合理性が法則性に還元できないことの決定的な論拠にはなり得ないと思われる。註 21 で述べたように、合理性を特殊な条件下においてのみ成り立つ法則性として理解できるとすれば、合理性が先に述べたような特殊な性格をもちながらもなお法則性に還元できる余地が残されていると私は考える。

25 事物的可能性とは、指示された事物をその事物たらしめるような諸性質を考慮

した上での可能性のことであり，思考可能性や概念的可能性よりも厳しいが，物理的可能性よりも緩やかな可能性である（信原 2002 を参照）。

文献

- Armstrong, D. M. 1968. *A Materialist Theory of the Mind*. London: Routledge & Kegan Paul. (アームストロング, D 『心の唯物論』 鈴木登訳, 勁草書房, 1996 年)
- Borst, C. V. ed. 1970. *The Mind/Brain Identity Theory*. New York: Macmillan. (ボースト, C 編 『心と脳は同一か』 吉村章他訳, 北樹出版, 1987 年)
- Child, W. 1994. *Causality, Interpretation, and the Mind*. Oxford University Press.
- Clark, A. 1997. *Being There: Putting Brain, Body, and World Together Again*. MIT Press. (クラーク, A 『現れる存在—脳と身体と世界の再統合』 池上高志・森本元太郎監訳, NTT 出版, 2012 年)
- Davidson, D. 1980. *Essays on Actions and Events*. Oxford UP. (デイヴィッドソン, D 『行為と出来事』 服部裕幸・柴田正良訳, 勁草書房, 1990 年)
- Dennett, D. C. 1989. *The Intentional Stance*. MIT Press. (デネット, D 『志向姿勢の哲学—一人は人の行動を読めるのか?』 若島正・河田学訳, 白揚社, 1996 年)
- Gibson, J. J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin. (ギブソン, J 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』 古崎敬他訳, サイエンス社, 1986 年)
- Heidegger, M. 1927. *Being and Time* (translation). Harper and Row, 1961. (ハイデッガー, M 『存在と時間 (上) (下)』 細谷貞雄訳, ちくま学芸文庫, 1994 年)
- 乾敏郎 (編) 1995. 『認知心理学 (1) 知覚と運動』 東京大学出版会.
- 金杉武司 2007. 『心の哲学入門』 勁草書房.
- 金杉武司 2014. 『解釈主義の心の哲学—合理性の観点から』 勁草書房.
- Kim, J. 1996. *Philosophy of Mind*. Boulder, CO: Westview Press.
- Kim, J. 1998. *Mind In a Physical World: An Essay on the Mind-Body Problem and Mental Causation*. MIT Press. (キム, J 『物理世界のなかの心—心身問題と心的因果』

- 太田雅子訳, 勁草書房, 2006年)
- Merleau-Ponty, M. 1945. *Phenomenologie de la Perception*. Paris: Gallimard. (メルロ＝ポ
ンティ, M 『知覚の現象学』中嶋盛夫訳, 法政大学出版, 1982年)
- Millikan, R. G. 1984. *Language, Thought, and Other Biological Categories*. MIT Press.
- 美濃正 2004. 心的因果と物理主義. 『シリーズ心の哲学 I 人間篇』信原幸弘編,
勁草書房, 所収.
- 信原幸弘 1999. 『心の現代哲学』勁草書房.
- 信原幸弘 2002. 『意識の哲学—クオリア序説』岩波書店.
- Peacocke, C. 1992. *A Study of Concepts*. MIT Press.
- Ryle, G. 1949. *The Concept of Mind*. Hutchinson's University Library. (ライル, G 『心
の概念』坂本百大他訳, みすず書房, 1987年)
- Searle, J. R. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge University
Press. (サール, J 『志向性—心の哲学』坂本百大他訳, 誠信書房, 1997年)
- Valela, E., Thompson E., and Rosch, E. 1991. *The Embodied Mind: Cognitive Science and
Human Experience*. MIT Press. (ヴァレラ, F 他 『身体化された心』田中靖夫訳,
工作舎, 2001年)